

<連載>

ザイコロジー

②

そだちと臨床研究会

川畑 隆

“断捨離”もよく考えて

サンヨーとカシオのワープロ専用機でむかし作ったフロッピーディスク内の文書をどのようにして読み出そうか…。他社文書変換機能のあるカシオのワープロをもっていたのですが、2年前に“断捨離”として廃棄してしまいました。“ものもちのいい”私としては自己革新のつもりで捨てたのですが、なんと無茶なことをしたのか!! それで捨てたものと同様の中古のカシオのワープロを手に入れたのですが、フロッピーディスクを読み込みません。あり得ることでしたが、その落胆たるや…。そして、ワープロ専用機で作成した文書をテキストやワードに変換してくれるソフト「コンバートスターセレクト16」を持っていてそれに期待をかけたのですが、やっぱりWindows10では動いてくれませんが、結局WindowsXPの入った中古パソコンを手に入れて…やっとうむかしの諸文書を目にすることができました。そこに至るまでには他にもうまくいかなかったことがいろいろあったのですが、まあそれはいいでしょう。

自分を見直した

雑誌の編集などもやっていたので、ディスク内の文書数はかなりです。タイトルに目を通していくと、「ああ、そんなことがあったなあ」「こういうのを書いたなあ」と一気にむかしに引き込まれます。開けて読むと、その時のことが甦ってきます。そして「ちゃんと仕事をしたんやなあ、俺」という思いが突き上げてきた…というのが、ここで一番書きたいことです。

いま68歳で、これまでをふりかえって、まあいろんなことはやってきましたが、とくに何かを熱心に突き詰めたとかいうものがつかめません。いろんなことを思い、書き、発言もしていますが、それらの根拠もあいまいで、いい加減な部分もたくさんあったように思っています。

でも、フロッピーディスクの中に「ちゃんと仕事をしていた、俺」をいくつも見つけました。たしかにそこには、具体的なことに細かい思考と分析と決断と実行を行った跡がいくつも残っていました。その時々でちゃんとやってた“証拠”を見て、「へえー」と感心しました。…ということは、それらのことは忘れていたけれど、その細部も含めた経験は脳に襲いにひとつずつ刻み込まれていて、いまに届いていることがあるのかもしれないということですね。まさに忘れていましたが“在庫”がこんなにもあって、自分を見直しました。

♪あれから2年たったんだ♪の彼女です

前置きが長くなりました。「京都児相マンズリー」と書いたフロッピーディスクの中に、“心を惹かれた女の子”が現れました。「京都児相マンズリー」の説明をここで始めると、いま中学・高校時のことを書いているので話が行き来しすぎます。またそのうちに書くことにして、「ザイコロジー①」の『あれから2年たったんだ』に登場したその女の子を紹介することにし

ます。彼女も今ではきっと68歳です。小倉にいるんでしょうか。

バレンタインデー

男の子たちはかわいそうである。女の子たちはチョコレートあげるあげないを選ぶことができる。しかし男の子たちは貰う貰わないを自分では選択できないのである。そのうえ貰えなかった男の子たちは、貰えなかったという事実について何らかの合理化をおこなわなければならない負担まで負わされるのである。そしてその合理化の内か、または自分を安定させられる合理化がなかなか見つからないとき、自分でチョコレートを買うという行動に走る可能性も大になる。その男の子たちの「これください」と店員に告げている姿を思い浮かべるとき、私は慟哭を禁じ得ないのである。

ご期待を裏切るかもしれないが、私が貰えなくて自分で買ったというお話ではない。

* * *

あれは中学3年の夏だった。私はバレーボール部に属していて、他の中学校に試合に行っていた。バレー部はわりと女の子たちに人気があって、その日も何人かが応援に来てくれていたのだが、私はいつにない特別な目を意識したのだ。木の幹が地上1メートル少しのところから70度ほどの角度でふたつに分かれているその間から、私たちがプレーをするコートの方をじっと見つめるその目。私であってほしい、きっと私だ、他の中学まで応援にかけつけさせるのはバレーの魅力なんかじゃなくて、好きな男への惹かれる思い…そんなふうには中3の子どもは考えなかっただろうが…、いや私はとっても慎重だったから自分じゃないかもしれないと言いつつも、でも期待は私の呼吸を乱していた。

その人の名を〇〇〇〇子さんといった。実はその夏の日以前から、私は彼女のことが気になっていたのだと思う。“もち肌”であった。髪の毛が長かった。美術部であり、放送部でもあった。そして隣のクラスであった。夏の日以来、廊下で顔を合わすとお互いにニコッとするようになり、私の彼女への想いはつのっていった。いつだったろう、年末か年始だったと思う、自分の気持ちを伝えようとしてその行動の決心とチャンスを見つけるのに苦労したのは、授業の合間の休み時間に廊下に呼び出して、こういうふうにして、と計画を立てて休み時間ごとに実行に移そうとするのだが、焦りが増してくるだけで、タイミングがどうも私に味方してこない。それでもやっとのことで5時限が終わったあと、廊下の片隅で、彼女の顔を間近に見ることができたのである。何て言ったろう。「つきあってください」なんて言わなかった。そんなこと言えるもんか。「友だちでいてください」って言ったんじゃないかと思う。何て純情なんだ。きょうび女の子から「お友だちでいましょね」なんて言われたらバカにされたように思うそのことばも、当時の私のことばとして聞けば、気恥ずかしくなるような生真面目な苦心のあとが見られるのである。ともかくも言ったんだ。5秒ぐらいだったと思う。そして彼女が「はい」と1秒答えて終わり。

そんなことがあっても生活に変化はなかった。ただ廊下ですれちがったときに、ああいうふうには打ち明けた僕だよ、そして打ち明けられた君だよ、という確認のニコッを交わすぐらいであった。

2月14日。キャンディとチョコレートの入った可愛い包みを彼女から貰った。その頃はちょうどバレンタインデーが流行りかけの頃で、カバンに入りきらない大きさのその包みが照れくさかった。彼女からそういう意思表示を受けたのはそれが初めてで、ミットにスパッと直球

のストレートを受けたようで、ときめきがあった。その頃はまだホワイトデーというようなものはなく、そしてチョコレートを買ったからといって、つきあいが進展したわけではまったくなかった。彼女からのアプローチの次はなく、私も焦りはありつつも何をどうするというのもなく、とうとう卒業式を迎えた。式のあと美術部の部室を訪ねた私は、「喫茶店に行こう」と彼女を初めて誘った。しかし答えは、「美術部のことがあるから行けません」であった。

これで終わりと線を引いたわけでもなく、かといって次のアプローチを具体的に計画したのでもなかったと思う。彼女のつれなさに気後れをしていたのか、卒業で別れてしまうという流れに抗するほどの根拠と勇気が持てなかった。

それから2、3日後、彼女から手紙を買った。ときめいた。しかしそれはすぐ失意に変わった。青いインクだったと思う。「なぜ川畑君にチョコレートをあげたのか今になってみるとわからない」「あなたとはつきあえない。理由はきかないで…」そんな文字がならんで、「悪い女だ」と思うでしょうね」と、その部分のインクが水分でにじんでいたのである。涙だと思えたのが少しの救いであった(お茶を飲んでいてちよつとこぼれたのだとは、決して思いたくなかった)。

よくわからなかった。彼女とまともに話をしたこともなかった。彼女のことは何も知らなかった。明確に二人の間にあったことは、私が「友だちでいてください」と言ったことと、彼女がチョコレートをくれたことだけであった。

高校に入ってから、友人を介して彼女に素焼きの置き物に文章を入れて贈った。何と書いたかは忘れた。彼女からの返信は届かなかった。

その後、友人から、彼女の両親が離婚したこと、進学した高校には一学期間通っただけで退学し、今はスナックで働いていることを聞いた。

(「京都兎相・川畑隆の『ほとんどマンズリー』(『京都兎相マンズリー』改題)」

第8号 昭和63年2月。一部に現在では不適切な表現が含まれているかもしれませんが、そのまま載せました。)

ソレふうの歌

「ザイコロジー①」に吉田拓郎の『どうしてこんなに悲しいんだろう』のことを書きましたが、きっと「ソレふう」の歌を作らなかったんだっていうのが、もう1つ出てきました。次の歌詞です。

なげだされて

うしろを振り返ったとき
すでに人はいなかった
別れを告げたのだが
もう一度と期待した
でも過ぎ去ったそこには
閉ざされた家並みだけ

こういうものかと
人のさだめを感じて
気を取り直してみようとする
でもやるせなく
心の中に行きどまる
それはそれは何

今の今の自分の頼りは何だろうか
急に投げ出された
見知らぬ世界に途方に暮れる
突然にやってきた自由らしいものに
迫ってくるのはただ虚しさ

今の自分を哀れに考えすぎるから
そんなに虚しいんだと
人に甘えたそんな気持ちは

今だけのものだと
心の底ではわかっているつもりでも
今はただ涙が流れるだけ

次の歌詞も「ソレふう」です。泉谷しげるに『帰り道』という曲がありましたが、「3年我慢して働けばラクになると言われたから僕は頑張ってたのにラクにならなかった…」ことを、♪3年、3年たったのに…♪と絶叫して歌い上げるもので、あの哀れさに私はハマりました。同じような気分で歌いたくて作り、自分で気に入って“けだるく暗〜い”感じでよく歌ってました。

もうここには

肩をたたきあい 僕と彼は歩いてた
青空の下で 流れる汗を拭きながら
僕の目は大きく輝いてた そして彼も
ふたりの求める喜びが 望みが
合わさり強め合って
新しい世界を夢見て いま行くんだと
ああ でもそれは夢だったのか
泣くことに疲れて 夢を見たのか
本当は彼は そこにいたはずなのに
そうなんだ 僕から離れていった
ふたりの心はひとつだと
意気込んでいたのに
あの あの彼が去っていった
彼でさえ 僕からは遠い人間だったのか
いない いない ひとり
もうここには僕だけひとり
ひとりで どうしろというのか
期待した暮らしは 遠いのか

他にも、♪愛は愛とて何になる♪の『赤色エレジー』や、♪だから踊ろう 僕と一緒に 君は幸せに眠くなれ♪の『清怨夜曲』など、独特の歌を唄ったあがた森魚を真似したのでしょうか、『村を出る』という歌詞もありますが、ここに載せるのはちょっと…。

恥ずかしくなるくらい明るい

同じようなテーマの歌詞がふたつ並びましたが、次のは恥ずかしくなるくらい明るくて、単純な二極化が頭の中で起きていたようです。

花をあげよう

君に花をあげよう
田んぼのあぜに揺れてる小さな花でも
それが美しいと思ったら
すぐに摘んで君にあげよう
そしたらもうそこには
花はなくなってしまいうけど
淋しい気がするけど
じきに新しいのが顔を見せるさ
一輪摘んで君にあげよう

その花を手にして君が
やさしく口づけて
高くかかげて心から
笑顔を見せたとしたら
僕はその時に
野原を駆け回りたような
喜びを感じられそうなさ
だから君に花をあげよう

そのやさしさに あの青空に
微笑みが浮かんだら君もきっと
誰かに花をあげるだろう
君に花をあげよう

どんなにちっぽけなものでも
僕の心が求めたら
すぐに摘んで君にあげよう

笑顔だけじゃなくて…

そんなやたらに花を摘んじゃいけないと思
いますが、次のはちょっといいんじゃないでしょ
うか、今でも時々歌ってます。

君がいる

悪かったのは僕だから
うんと喋らせておくれ
しばらくの沈黙の間に
つもりつもってた求める気持ち
信じて楽しく過ごしてたのに
ふいに訪れた話の途切れ
僕には君が遠くに見えた
だから妙に避けてしまった
僕が懸命に喋るのを見て
きっとわかってくれるだろう
いま取り戻した僕の君
寂しさから抜け出した

さまよっていた僕だから
この手をつかまえておくれ
君をはなしたくない僕だから
この目をじっとじっと見て
しばらくの沈黙がこの僕に
君の大切さを教えてくれた
僕は求める優しさを
君の中に見つけた
僕のこの目に君が映り
うるんでいるのがわかるかい
もう大丈夫 これからは
僕のそばには君がいる

ホントのことに目が向き始めた?

次の「君」はきっと「僕」のことです。つま
り「君」への「僕」の投影です。そして、「ホ
ント」に目を向け始めた自分を感じます。

君について思い出して

君について思い出して
大勢の前であの時
君は自分が指名されたから
何かを言わなくちゃと思ってたから
考えはまとまらなかったけど
言い出して それから
途中で自分が何を言ってるのか
わからなくなってしまって
突然 絶句してしまって
天井を見上げたり うつむいたりして
可哀そうなくらい困り果て
真っ赤に上気してしまったんだね

君について思い出して
バスを降りてあの時
知ってる女の子と一緒にだったから
一緒に帰ろうと話しかけた
久しぶりだね
もう何か月会ってないかななんてね
そう話題は浮かんでこない
黙ってしまい たまらなくなって
話すことないねなんて言い出して
あと三十メートルで道が分かれる
はやくその時間がたたないかと
一步一步ふみしめて できるだけ明るく
サヨナラと言ったんだね

高校生の頃の在庫はひとまずこれぐらいです。

2023. 08